研究課題　幕末維新期における民衆生活の改変と信心の歴史的転回に関する調査･研究

研究経費　五〇万円

研究組織

　研究代表者　　　奈倉哲三（跡見学園女子大学名誉教授、以下A）

　所内共同研究者　石津裕之・杉本史子・箱石大

　所外共同研究者　靱矢嘉史（早稲田中学校・高等学校教諭、以下Ｂ）・児玉憲治（千葉県文書館嘱託職員、以下Ｃ）・千葉茉耶（野村胡堂・あらえびす記念館学芸員、以下Ｄ）・斎藤悦正（本郷中学校・高等学校教諭、以下Ｅ）・芹口真結子（岐阜大学地域科学部助教、以下Ｆ）・清水有子（明治大学文学部准教授、以下Ｇ）

研究の概要

（１）課題の概要

　近世の民衆は各地の日常的な生活のなかに「信心行為」を抱え込んでいた。幕末期において、その信心は社会変動の一環として大きく歴史的に転回する。その転回は、維新期においては権力的な改変によるものも大きいが、民衆自身が自らの生活を改変していこうとする苦闘のなかで、信心を転回していく動きとしても生まれていた。従来、「幕末民衆宗教の誕生」といった括りでは捉えられていたこの歴史事象を、ごく普通の生活を営む民衆が地域生活を改変させるなかで、信心をも転回させていた現象として、史料から解明する課題が本共同研究の根底にある。この根底の課題を果たすには、各地の多様な信仰の実態を、地域生活が具体的に判る史料とともに解明することが必須である。本共同研究の直接的な課題は、この根底の課題に寄与し得る史料が、どの地域にどのように存在しているかを目録の状態を含めて具に調査したうえで、その史料研究成果を社会に発信することにある。

（２）研究の成果

　Ａ、柴崎村から拝嶋村まで９ヵ村の村民が、九ヵ村用水の共同利用と運営を核とした地域生活共同体を営んでいたことを解明、旱魃時には９ヵ村の合議で用水の管理・修復が細かく決められ、共同で技術改善に当たっていたこと、一方で、嘉永年間の旱魃時には大山への代参を含む呪術的な雨乞祈願が熱心に展開されていたことも解明した。だがこの雨乞祈願では、代参人帰参を受け９ヵ村全村民が多摩川河原に出て万垢離するなど、用水修復に全力を傾注すべき時期に、労働力が大きく削がれることから、文久年間には、普済寺での大般若経転読祈禱に切り替えたり、帰参を受けての万垢離を用水取入口での「神水」撒きに代え、用水修復工事への投入を図ったりするなど、呪術はなおも有効としながらも、技術優先で信仰の転回を地域生活共同体全体で計っていたことを解明した。また、こうした研究方向を一つの典型的試みとして、共同研究員全員に示すことが出来た。Ｂ、武蔵国各村において、鎮守を管理する修験・寺院と村方の間に幕末期から認識の相違や対立が潜在し、維新の際に神仏分離や修験・寺院の復飾・神勤が実施されるなかで係争として顕在化するという、全国に共通する動向を看取することができた。一方、維新後に復飾して神職となっても、近世以来の旧修験と氏子・旦那との関係（配札・祈禱）が継続していたと思われる事例も確認することができた。共同研究による他地域（Ｄの岩手地域）の修験史料の調査成果などをふまえると、明治維新・神仏分離が、修験など宗教者と村方の関係にもたらした、近世からの変容・断絶の側面と連続性の双方について個別実証を積み重ねて総合的に位置づける課題が浮上した。Ｃ、中奈良村の村況および同村の天王宮祭礼の概要を把握し得た。ここから、農村荒廃を背景として生じた、天王宮祭礼・信仰をめぐる村内の軋轢が明らかになった。また、購入・複写した文献から把握した当該地域の水利関係については、Ａの調査報告を参考にしつつ、次年度の史料調査で解明する。Ｄ、調査を行った史料群は古文書類を中心とした膨大な量で、総点数４桁になると思われ、無造作に箱に入った状態の未整理もので、目録もなかったため、データベース入力による目録作成をしながら撮影するという作業となった。全量からみればまだ緒についたばかりだが、今後の継続調査のための基礎的作業ができた。史料群が修験関係の史料であるという点ではＢの調査活動との関係から学ぶことも多く、今後の史料整理に活かしていく。Ｅ、近世後期から明治初期までの出入・訴訟関係文書を調査し、地域社会における紛争処理過程で寺院が関与する調停や、村民の入寺行為のうち、複数村の諸寺院による連携の事例を見た。この事例から地域内諸寺院の社会的機能とその相互連携の究明について、Ａの旧来の研究を活かし、信仰・生業・支配など複眼的視点からの検討する方向性が生じた。Ｆ、安城市歴史博物館の調査では本證寺が作成した「諸事記」や「御請印形帳」、本山家臣ないし末寺・触下寺院宛に作成した書状類の紙焼きを撮影。宗名論争に関する寺内百姓が作成した史料などを発見した。また、岐阜県歴史資料館では阿子田昭家文書のうち、幕末期に発生した西蓮寺檀家不帰依一件に関する史料原本を撮影した。阿子田家「薬師寺来歴(写)」などでは、争論に関係する寺院の由緒を確認することができた。また脛永村会所取立一件は、剃髪僧形となった百姓が自家の寺院化を目指し、他の門徒と共に檀那寺からの独立を目論んだ事件で、既存仏教教団内における民衆の信心の転回事例として把握することができた。寺院と地域生活の関係では、これまでのＡ・Ｅの研究成果を活かしている。Ｇ、浦上潜伏キリシタンの「信心」に関しては、長崎奉行所の「御用留」に自葬で摘発された数名分の口述書があり、その詳しい理由を知ることができた。また一部地域（里郷・平野宿・中野郷）の人数・年齢・名前を記載したリストや、浦上四番崩れの流罪者の財産処分に関する書類から、信徒の生活状況が、断片的ではあるが解明できると思われる。同地域の民衆に関しては、長崎奉行所と隣村の渕村庄屋の「御用留」から信仰生活に関して日常的にいかなる管理がなされていたかが分析可能であるが、Ａが解明したような「地域民衆生活」について追究しているものの、手がかりとなる史料をまだ得ていない。ただし、明治初期の西彼杵郡の寺院明細帳から、浦上村民の生活圏にある寺院名は把握できた。  
 以上の成果を得た一方で、コロナ禍のため史料編纂所への来所調査は不十分であった。また、対面での共同研究ができないことを補う方法として、毎回の調査ごとに「調査概要報告書」を作成、送信して共有化を図ったが、その報告書を相互評価・批判することにより、共同研究としての質を高めていくという点で、不十分さを残した。